

かゑらんとかねて思へハ 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第143号

令和4年5月10日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

## 公開講座「楠正行の生涯を学ぶ」第7回 江戸期の正行

# 徳川光圀による「嗚呼忠臣楠子の墓」の建立

公開講座は3か月ぶりの再開となりました。今まで5回に分けて楠正行の生涯を見てきましたが、今回から3回は、正成・正行死後、どのように楠氏が語り伝えられてきたかを、残る史料等からひもときます。今回は「江戸期の正行」です。

### 第7回 江戸期の正行 正成、太平記読みの世界で語り継がれる

正成・正行死後、正儀の活躍もありますが、室町時代は賊軍として追われる身であったので、楠氏の末裔は全国に飛び散っています。また、姓も頻繁に変えたようです。

しかし、織豊期から江戸初期にかけて、加賀前田藩から太平記読みの世界が広がっていきます。その原典になったと思われる書が太平記評判秘伝理尽鈔で、その奥書には「太平記の評判の者、武略の要術、治国の道なり。その器の者にあらずば、伝授かなわず」と記され、名和家伝来の秘伝として伝わったとされる理尽鈔が、前田利常お伽衆の一人であった大運院陽翁によって、岡山池田藩、唐津寺沢藩、金沢前田藩の重鎮らに伝授されたのが始まりです。

そして、17世紀、出版業が成立後、理尽鈔の享受層は一挙に拡大し、武家対象から大道芸能としての太平記読みの世界に広がっていきました。

江戸期の太平記講釈として、享保15年1730大坂の浮世絵師長谷川光信が書いた「絵本御伽品鏡」や江戸末期には太平記読みに系譜を引く軍談講釈が錦絵として『諸軍談』が残るなど、目覚ましい展開を見せたことが分かります。

太平記の正成像は、①武略・智謀の武将、②忠臣、③神仏信仰者として描かれますが、太平記読みの正成像は、

①智謀ある軍略家、②当代の政治への最も厳しい批判者、③徹底した文書主義、④巧妙な家臣掌握、⑤評定制の導入、⑥農政にたけた指導者、として描かれ、正成は、家臣・領民を掌握し、模範的な政治を行う理想的な為政者・武略と治国を教諭する指導者となっていきます。

名君・正成像は、1600年代に相次いで発刊された恩地左近太郎聞書、山鹿素行の楠正成一巻書、室鳩巢の「楠諸氏教」等によって定着していきました。

### 高山右近、正行辞世の歌を引用

キリシタン大名の高山右近は、信長、秀吉時代には良好な関係が続きますが、秀吉の天下統一後から家康時代には、確執が始まり、加賀の前田藩にお預けの身となります。高山右近は、この加賀で26年の流浪生活を送りますが、家康が幕府を開き、キリシタン弾圧を強化した結果、キリシタンの叛乱を恐れた家康によって国外追放を命じられます。

右近は、キリシタンが故に自ら命を絶つことが許されず、マニラに追放の身となりますが、この時、前田利家の妻まつに充てたとされる日本訣別の書状を遺します。この書状の中で、楠正行辞世の歌を引用し、“正行は戦場に向かい戦死して天下に名をあげましたが、私は、今、南海に赴き、命を天に任せて、名を流すばかりです”と記しました。江戸初期、全国の諸大名に正行の事績が広く知れ渡っていたことを示す貴重な書状です。

### 幕末の志士たちがこぞって訪れた正成墓

江戸期の正行（楠氏）を語るうえで、避けて通れない事績は徳川光圀による嗚呼忠臣楠子の墓の建立です。

光圀は、自らの墓に「皇統を正閏し、人臣を是非し、輯めて一家の言を成す」（天皇の系統を正しく治し、過去の忠臣や婦人などの誤謬を訂正する）と記し、生涯をかけて大日本史を編纂するとともに、17年の歳月をかけて

南朝事績調査をしています。

そして、正成の覚悟の戦死は大義の正道と評価し、神戸・湊川に「嗚呼忠臣楠子の墓」を建立、碑陰に朱舜水作正成像賛を刻みました。この朱舜水作正成像賛は、万治3年1660年、加賀の前田綱紀が狩野探幽に描かせた楠公父子決別図（掛け軸）に載せたものを、後に光圀が知るところとなり、採用されたものです。

摂津名所図会に残る「湊川楠正成墳」は、西国街道沿いに建つ正成墓が描かれており、湊川神社発行の「神戸と楠公さん」には、墓所を訪れた幕末の志士たちとして、吉田松陰、真木保臣、高杉晋作、坂本龍馬、伊藤博文、西郷隆盛、三条実美、大久保利通、木戸孝允が紹介されています。

### 赤穂事件、大石は正成の再来

元禄15年1702、大石内蔵助が赤穂浪士による吉良邸討ち入り事件、世にいう赤穂事件が勃発します。

すると、同年に出版された紅赤見聞記には、「楠の今大石となりけり なほも朽ちせぬ忠孝をなす」と、大石内蔵助は楠正成の再来として登場しています。

そして4年後の宝永3年には、浅野内匠頭を塩屋判官に、吉良上野介を高師直に見立てた赤穂の塩と高家筆頭職からの連想に基づく近松門左衛門の浄瑠璃「碁盤太平記」が初演されました。

また寛政9年1797には、滝沢馬琴の黄表紙「楠正成軍慮知恵輪」が発表され、挿入画として「楠、大石に化する図」が掲載され、菊水の旗を持つ正成が、火事装束の大石に『化』している姿が描かれました。足利本家が存在しない赤穂事件当時、足利将軍の名跡を伝える由緒ある家筋である吉良家を断絶に追い込んだ大石内蔵助は楠正成の再来『生まれ変わり』の様を連想させたのでしよう。

### 吉田松陰、七生説で正成礼賛

儒者ネットワークによる正成評価の定着も、楠公精神の高揚に大いに寄与しました。

藤原惺窩に師事し、木下順庵、安東省庵、貝原益軒ら門弟5000人を輩出し京学の伝統を樹立した松永尺五、綱吉時代に幕府の儒臣となり室鳩巢や新井白石を門下生にした木下順庵、朱舜水に師事し、吉野朝を正統とする「日本史畧」を書き、三忠伝を著した安東省庵、加賀藩の小坊主出身ながら木下順庵に師事し、その著「名君家訓」は享保のベストセラーになった室鳩巢らの存在です。

前期水戸学の朱子学的大義名分論から後期水戸学の尊王敬幕論は思想的指導力を失っていきませんが、尊王倒幕の鑑となった正成の意は、山鹿素行の楠流兵学から山鹿流師範の吉田松陰に引き継がれ、守るべき国家は幕藩国家ではなく、「国体」と表現される日本の国家、即ち一君

万民国家であると、吉田松陰は幕府の権威を否定し、草莽崛起を呼び掛け、明治維新開花の導火線となっていくのです。

吉田松陰は、萩より江戸の獄に搬送される途中、正成墓に4度目の参詣をし、七生説をつくりました。

「余嘗て余嘗て東遊して、三たび湊川を経、楠氏の墓を拝して、涕涙禁ぜず。其碑陰に明の徽士先生の文を勒するを觀るに及んで、即ち復た涙下る。余楠公に於いて、骨肉父子の思あるに非ず、師友交遊の親あるに非ずして、自ら其涙の由る所を知らず。先生に至ては、海外の人なるに、反つて楠公を悲む。而して吾れ又朱生を悲む。」

意 — 私（吉田松陰）は楠正成公の事を直接には知らないが、正成公の事を思うとなぜか涙する自分がある。朱舜水先生に至っては異国の人であり、なおさらであるのに、また涙する自分がある。

### 朱舜水作、正行像賛の発見

そして、江戸期の正行を語るうえで、最大の発見は、朱舜水が残した楠正行像賛です。

扇谷は、前田綱紀が狩野探幽に描かせた「楠公父子決別図」の賛文であれば、父・正成のみならず、子・正行にも残しているのではないかと、探し求め、終に朱舜水全集巻17に正行像賛148文字を発見したのです。（詳しくは楠正行通信12号・24号参照）

### ■江戸期の楠氏関連事績まとめ

慶長の頃	“太平記評判”流行し始める
慶長19年	高山右近、「日本訣別の書」残す
万治2年	安東省庵、長崎に亡命投下した朱舜水にあう
17c半ば	「太平記評判秘伝理尽鈔」出版される
寛文10年	前田綱紀、探幽に「父子決別図」書かせる
天和元年	安東省庵、吉野朝正統論を記す
元禄5年 1692	室鳩巢「名君家訓」記す。徳川光圀「嗚呼忠臣楠子の墓」建立
17c末	講談の源流～太平記読みの登場！講談師の誕生と読書人による読み語り
元禄15年	赤穂事件
宝永3年	近松門左衛門「碁盤太平記」初演
正徳5年	光圀、舜水先生文集出版。徳川綱枝、大日本史刊行
享保6年	名君家訓、「楠木正成諸士教」に改題
寛政9年	滝沢馬琴の黄表紙「楠木正成軍慮知恵輪」

（文責：四條躰楠正行の会代表 扇谷昭）